

批評・紹介

辛亥革命の思想

島田虔次・小野信爾編、

昭和四十三年二月 筑摩書房
A5判 二六五頁

中國の古典文學が平易な日本語に翻譯されて廣い讀者を持つようになつてからすでに久しいが、近數年の間に、中國の歴史の理解を助ける文獻が次々に日本語に翻譯されて、少數の専門研究者の研究資料から多くの讀者の讀みものへと解放されることになつた。たとえば、筑摩書房の『世界ノンフィクション全集』とか、平凡社の『東洋文庫』などが、そのもっとも大規模な仕事であらう。孫文や毛澤東は別として、中國革命史の中で記念さるべき人びとの書き残したものが翻譯されるようになったのも、最近になつてのことである。島田虔次氏の『中國革命の先驅者たち』（筑摩書房、一九六五）は、そのような仕事の『先驅』であつた。今回出版された、島田虔次・小野信爾編『辛亥革命の思想』（筑摩書房、一九六八）は、これにつづくものである。

本書は、島田・小野兩氏の名を編者として冠しているが、本書あとがきにもあるように、京都の中國革命史研究會、現在には京大人文科學研究所辛亥革命研究班として研究活動を續けて來られ、また續けておられる共同研究グループの研究計畫の一環であり、そこから生み出されたひとつの研究成果でもある。當初、『辛亥革命論説集』

として二冊にまとめて出版される計畫であつたものの第一冊であり、従つて、本書の續編（第二冊）も、やがて編集・出版されるものと思われる。前掲『中國革命の先驅者たち』のあとがきによれば、この京都の中國革命史研究會は、辛亥革命に關して、かなり長期にわたる研究計畫と、文獻紹介・研究成果出版の計畫を持つておられるようである。すなわち、島田氏のあとがきによれば、『中國革命の先驅者たち』、『辛亥革命論説集（假題）』（全二冊）、『民報概要（假題）』、『民報索引』、『辛亥革命研究論文集』の全六冊の出版が計畫されており、今回の『辛亥革命の思想』は、その全六冊の第二冊目に當るわけである。

本書に收められている文獻は、鄒容の『革命軍』、陳天華の『警世鐘』、胡漢民の『民報』の六大主義、それから、『龍華會章程』、『共進會宣言書』の五篇である。『革命軍』は當時の排滿共和論と民族主義の、『警世鐘』は革命派の帝國主義認識の、それぞれ典型たる意味をもつものとして收録され、『民報』の六大主義は、中國革命同盟會の革命の綱領として、『龍華會章程』・『共進會宣言書』は、『民間の反體制秘密結社の革命派の組織工作の綱領』として、それぞれ收録されたことは、あとがきに明らかにされている。各五篇は、いずれもわかりやすい現代文に翻譯されているが、いくつかのテキストにあたりながら、誤植と思われるようなところは意味が通るように譯者の判斷で訂正されており、讀者に親切な譯文をつくるための大變な努力のあとが見られる。各篇に注がつけられており、そのつけかたは必ずしも統一されてはいないけれども、史料批判と難解な單語の説明を最低限として、さらに讀者の理解を助ける説明が豊富に行なわれている篇もある。その上に、それぞれ

獨立した論文とも思われる解説が各篇に附されてある。

各篇の譯・注・解説を擔當されたのは、『革命軍』が小野信爾氏、『警世鐘』が島田虔次氏、『民報』の六大主義が狭間直樹氏、『龍華會章程』、『共進會宣言書』が藤田敬一氏で、各々に擔當者の個性が見受けられるが、この種の編集ものとしては立場が一貫しておりチーム・ワークがよくとれている。あとがきは、編者の一人小野信爾氏が書かれている。

『中國革命の先驅者たち』のあとがきで、島田氏は、前に紹介した全六冊の計畫のうち、最後の二冊を除いては、「一般——すくなくとも非専門の讀者を對象とする」といわれているが、今回の『辛亥革命の思想』は、私をもふくめて廣い讀者に大變わかりやすい現代文で二〇世紀初頭の中國の革命思想に接する機會を與えてくれた。これまで四角い文字の斷片といつしよにバラバラに頭の中に入っていたこれらの論說・主張は、それぞれまとまつた世界觀として、一層はつきりと、一層身近かに、理解されるようになった。

私たちは、自分自身の経験から考えても、また、中國革命に關心を持った多くの人びとの経験をきいても、中國革命の生き生きとしたイメージは、ルポルタージュ、小説、回憶錄などによってつくられたものだということを知っている。これらのものを翻譯し、紹介する仕事をしてきた人びとの名前は案外知られにくいものだけれども、そういう仕事が中國研究者をもふくむ日本の一般の人びとの中國理解にどれだけ大きく貢獻したか知れない。

『辛亥革命の思想』に收録された五篇の文獻そのものから、何を讀み取り、何を學ぶかは、讀者の問題意識によってことなるであらうが、この五篇の文獻を讀むことによって、讀者は、二〇世紀初頭の中國の革命の息吹きを感じとることができるであらう。變法運動の破産と帝國主義の中國分割を経て、滅亡するか革命するかいづれかの道を選ばざるを得ないことを自覺し、革命にその生涯をささげようと志した人びとが、中國の現實をどのようにとらえ、何に希望を托し、どういう人びとに對してどのようなことを訴えようとしたのか、本書の五篇の文獻は、そのようなことを理解するのに役立つ。非常な感動を覺えながら讀み進む箇所もあり、ああこんなことを考えていたのかと頷きながら自分のこれまでの常識を組み替えるような箇所もある。讀者はまた、各篇につけられた注と解説をガイドにして、これらの文獻についての讀み込みを深め、いろいろの角度から考え、學ぶことができる。

注については先に觸れたが、全體として實に周到さをきわめており、専門研究者にとつても、専門外の研究者、讀者にとつても、各文獻の理解の助けになる。史料批判をおろそかにしてこれらの文獻を手あたり次第に使ってきた人は、私のように冷や汗を流すことになるだろう。このような注を見るにつけても、共同研究でなければ、これだけ親切な注をつけられるような仕事はなかなかできるものではないということを感じさせられる。そのことの意味はさておくとしても、中國近・現代史に關してこのような共同研究を行ない得る條件というものは、今日の日本の學界にも在野にもほとんど無いといつてよい。京都の中國革命史研究會は特異な存在である。

さて、各文獻の解説は、いずれもそれを書いた革命家・革命的インテリゲンチヤ、あるいはその團體についての紹介が主となっており、それぞれの文獻が出された歴史的背景、それぞれの文獻の革命

史における位置づけの説明が行なわれ、さらに、これらの文獻に表現された革命思想―世界觀の階級的立場の考察もなされている。全體の體裁は必ずしも統一されているわけではなく、とくに、島田氏の陳天華と『警世鐘』の解説は、『中國革命の先驅者たち』の解説の續編のようなものであるから、これをあわせ讀まなければ十分ではない。傳記・事績に重點を置く解説と、思想の内容の考察に力を注いでいる解説があるが、いずれにしても、五篇の解説を通して基本思想はほぼ一貫している。また、こういうものを目にし、啓蒙された當時の中國の若いインテリゲンチヤの群像を描き出す努力がなされているところは、大變面白い。回憶録や自叙傳など、最近中國で出版された材料が非常によく讀まれており、回憶録や自叙傳の著者の眼を通してこれらの文獻を受けとめようとする姿勢が見られる。

使つてある材料の豊かさ、立場の鮮明であることが、本書の解説部分の特徴である。本書のあとがきにもあるように、解説者たちは、一九一一年の中國革命―辛亥革命を、中國の反帝反封建の革命のはじまりと位置づける。そして、當時の革命家たちは、中國の半植民地半封建と規定されるような社會を階級社會としてとだけ認識していたか、帝國主義をどのように理解しこれとどのように闘おうとしたか、農民闘争をどのように評價し何に依據して革命を遂行しようとしたか、というような問題が投げかけられることによつて、本書に紹介された革命思想の、ブルジョア革命思想としての弱點・限界が明快に浮きぼりにされている。

たとえば、『民報』の「六大主義」の胡漢民の思想については、彼のいう革命における「客觀」とは、革命家（「主觀」）によつて指導される人民大衆一般とでもいふべきあいまいなものであり、

沒階級的な人民一般の利益の代表者として革命家の役割が導き出されているが、こういう弱點は、胡漢民のみならず、當時の「ブルジョア革命派」に共通するものであったという指摘がなされている。

そして、三民主義とはいつても、「清末の革命派の理論のなかで十分深められたものは反滿民族主義だけであつた」とし、同盟會綱領にあたる『民報』の「六大主義」に見られる「觀念的沒階級的要素」が、やがて人民の闘争の發展のなかでためされ拂拭され、人民解放の思想に高められて行く歴史を展望している。『龍華會章程』・『共進會宣言書』の解説においても、革命家たちが組織した反滿秘密結社の連合組織は、革命權力として新王朝しか構想することができず、農民階級との結合も個別的なものにすぎなかつたことが指摘されているし、また、共進會は、「政治革命、社會革命のヴィジョンの脱落、帝國主義との協調の路線」をとつていたと、その弱點を明らかにされている。しかし、革命家たちがその革命思想で秘密結社を教育し、武裝蜂起にたちあがらせ、清朝支配體制の崩壊を促進したことの意義と、革命家たちの自己犠牲を顧みぬ革命的情熱とは、高く評價されているのである。

このように、「ブルジョア革命派」の思想的・理論的缺陷は明快に分析され批判されるのであるが、そのことは、決して當時の革命家たちの情熱を冷血漢のように見過すことでもなければ、その魂を殺すことでもない。滿二〇歳になるかならぬかで獄死した郷容の『革命軍』についても、次のように書かれている。「もちろん『革命軍』を今日の觀點からみて、その缺陷を指摘することはやさしい。革命の擔い手を國民一般に求めつつも、いかにして組織するか、運動の組織論が缺如している。反滿にすべてを集約し、階級關

係、とくに農民の反封建闘争の評價がない。帝國主義反對が弱く、經濟問題が缺落している等々。だが、それらの多くは辛亥革命全體に共通する缺陷であつて、問題は十八歳の少年が、時代の制約のなかでこれだけのものを書き、またそれが同時代の青年の要求に合致し、その心を捕えたことの方にある。」と。

ごく少數の突出した革命思想家個人の傳記やその思想についての研究業績はこれまでにもずいぶん發表されていたが、本書の解説を讀むと、多くの革命家たちの群像がイメージの中に浮かび上つてくる。傳記・事蹟の部分は、そのようなイメージ構成に役立つ。

注と解説については、なお考證を加えるのが書評をするものの仕事であるのかもしれない。たとえば『民報』の「六大主義」の誤植を讀み込んでの譯出のしかたとか、『龍華會章程』が書かれた年を本書のように一九〇四年とするのが妥當かどうかとか、今後論議されるであろう問題が確かに残されている。『龍華會章程』は、檄文の日付どおり「甲辰」の年すなわち一九〇四年に龍華會によつて出されたものと私は思つていたのだが、解説によると中國の研究者の間ではいろいろの議論が出てゐるようだ。解説者がどうして一九〇四年説をとられたのかは必ずしも説明が十分でないが、一九〇三、四年の革命思想の開花と、浙江における革命家たちの活動から考えるならば、この説にとくに無理があるとは思われにくい。

本書の出版は、先に紹介したような計畫の一環であるが、文獻紹介の意義については後まわしにして、本書の出版の意圖と本書における革命思想の扱いかたについてまず考えてみることにしよう。本書のあとがきには本書出版の目的が書かれてある。島田氏が、『中

國革命の先驅者たち』のあとがきで文獻紹介の長期計畫を思い立たれた理由を書いておられるのだが、本書のあとがきは、この島田氏のあとがきに觸れ、さらに加えて、「ただ指摘しておきたいことは、一九四九年の中國革命を理解するためには、辛亥革命の理想と挫折を知ることがどうしても必要だということである。それは辛亥革命が、二千年來の專制王朝の最終的打倒、異民族支配の排除という點で、ひとつの到達點であり、同時に民族解放・民主主義（反帝國主義・反封建主義）という達成できなかった課題を擔つての、苦澁にみちた出發點でもあつたからである。」と述べられている。そして、今日にいたる中國革命の歴史の中で、辛亥革命はその挫折を通じてどのように生きつづけ、その理想はどのように繼承されてきたか、中國革命の事業に献身してきた革命家——たとえば毛澤東——の革命の生涯の中で、辛亥革命はどのような意味を持ったのかを、あとがきは書かれている。『中國革命の先驅者たち』では、世界史上のブルジョア革命のひとつとして一九一一年の辛亥革命を理解しようとする姿勢が感じられたのに對し、本書は、今日にいたる中國革命を理解することのために編集・解説が行なわれていると考えられる。

また、本書は、あるひとり、または數人の革命家・革命的インテリゲンチヤをまずとりあげて、その人物のことを主として問題にしているのではない。本書は、反帝・反封建の革命運動のなかでの思想を問題にされており、そのことは、文獻の選びかた、編集のしかた、解説のしかたにはつきりとあらわれている。當時の革命家たちは、言論によつて革命のための「輿論の準備」を行なうと同時に、「前臥後起」の武裝闘争を行なつて清朝の打倒をめざした。この

「車の兩輪」の一方の問題として、革命家・革命的インテリゲンチヤとその集團の、文字に書かれた思想というものが位置づけられている。文字に書かれた思想をそれだけのものとして論ずるならば、それは歴史という大きなうねりの波頭だけを眺めているようなものである。これまで、中國近代の思想といえは、誰が問題とされるかは相場がきまっていたようなものであった。『民報』の六大主義、『龍華會章程』、『共進會宣言書』などが收録されたことは畫期的なことであり、『革命軍』と並んで、陳天華の『警世鐘』が選ばれていることも、本書の特徴を示している。革命思想をただ抽象的な思想としてのみ扱うのではなく、革命運動のなかでの思想として問題にするということは、本書のすぐれた特徴であり、思想を趣味にしない健康さ、眞面目さが感ぜられる。

しかし、讀者の歴史觀に榮養を與え、編者・著者と讀者の雙方の歴史觀を鍛えるのに、このような思想の扱いが萬能であるというわけでは決してない。本書は、専門・非専門の研究者、教室で歴史を教える教育者、中國革命について學ぼうとする人びとに、着實な材料を提供しており、今日の學界もまた、本書出版の意義を高く評價するであらう。オーソドックスな學界のレベルでも、本書を凌駕できるような考證・研究はなかなかないからである。ひとりの革命家・革命的インテリゲンチヤの生きかたを追求し、その生きかた、思想と格闘するというよりも、ひとつの主張や訴えが客觀的にもった意味を追求するという本書の方法は、きわめて歴史的な着實な方法といえるけれども、たとえば武田泰淳氏の『秋風秋雨人を愁殺す——秋瑾女士傳——』（筑摩書房、一九六八）のような切り込みの鋭さを持つことはできない。同じ計畫の一環である『中國革

命の先驅者たち』が、陳天華の『絕命書（遺書）』を紹介したことは、二〇世紀初頭のひとりのインテリゲンチヤの生きかたを考える上で大きな意味があった。本書に收録された『民報』の六大主義の執筆者胡漢民が、やがて一九二〇年代の中國人民の解放闘争の高揚と蔣介石及び國民黨右派の反革命クーデターの中でどのような立場をとったかは、本書の解説が概略を述べており、解説者は胡漢民の「右派的弱點」を、『民報』の六大主義の中に指摘されているが、收録の意圖と解説の重點はここにあるのではない。それは、本書の思想の扱いから考えて當然のことでもあるのだが、それにしてもある不安が起つてきて、孫文と胡漢民にはこういう違いがあったという説明をきいて納得したいという氣持になるのである。

中國の先覺者たちが、二〇世紀の初頭、はじめて「革命」という問題にぶつからざるを得なくなった時、 $\wedge$ カクメイ $\vee$ とは $\wedge$ イノチ $\vee$ の問題であった。武田泰淳氏の『秋風秋雨人を愁殺す——秋瑾女士傳——』は、 $\wedge$ カクメイ $\vee$ を $\wedge$ イノチ $\vee$ の問題として受けとめない限り、中國革命も中國もわからぬ、ということをお願いしたいのはあるまいかと思う。 $\wedge$ 革命 $\vee$ はいずれにしても死生の問題、死生觀の問題であり、歴史の現實においてそうであった。毛澤東の『人民に服務する』も、その死生觀からはじまっている。武田泰淳氏は、自分自身に對して正直な文學者だから、こうした切り込みをかけてまっしぐらに押しまくるような書きかたはされなかった。しかし、 $\wedge$ 革命 $\vee$ がいつもと知れず自分たちの知識の中に紛れ込み、安定した常識の一部分と化した時代、 $\wedge$ 革命 $\vee$ とは進歩の積み重ねの結果としていつか成就するものだというように、漠たる未來に $\wedge$ 革命 $\vee$ が位置するようになった時代、革命運動史研究が學問の安全圏の中

で繁盛しはじめた時代——こうした時代にぬくぬくと生きて、中國革命史研究を自分の主たる仕事と決めこんでいる私などには、いきなり短刀をつきつけられたようなものである。武田泰淳氏がこのような本を書くことを思い立った、あるいは書かずにはいられない氣分になられたのは、それだけの今日の思想狀況があるからであらう。

もちろん、『辛亥革命の思想』の編集・翻譯・解説に携わられた方がたに今日の日本の思想狀況についての鋭い問題意識がないというのでは決してない。そのことは、あとがきや解説の中に十分讀み込むことができる。だからこそ、比較したい氣持になったのである。歴史家と文學者の違いといってしまうばそれまでだが、守備範圍の違い、闊いかたの違いが、歴史へのアプローチの違いでありかたを生み出しており、このふたつの本をほぼ同時に讀んだ私は大變面白く感じた。今日、あらためて一九一一年の中國革命＝辛亥革命が問題にされるとすれば、その意味は、中國革命とは何か、今日の中國はいかなる革命の傳統を背負っているのかを知り、理解するということであり、さらに、革命とは何かを問うことである。アプローチの違いはあるけれども、『辛亥革命の思想』の出版の今日における思想的意義は、そのような意味において、『秋風秋雨人を愁殺す』と同様に大きいといわなければならぬ。

先に紹介したように、京都の中國革命史研究會は、今後も辛亥革命に關する文獻の翻譯・概要・索引などを出版されて行くことである。『中國革命の先驅者たち』のあとがきで、島田氏は、近代中國の事象についての紹介がいかに貧弱であるかということ述べて

おられ、近代中國の原典の翻譯・紹介という點では、孫文以外、二、三の文藝作品をのぞいてほとんど皆無だといわれている。そして、「とりわけ痛切であつたものとして、數年前わが研究所（京大人文研）の比較革命史研究班での經驗を、ひきあいだしておきたい。この研究班は要するに、日本關係、中國關係、西洋關係の研究者が會同して、ブルジョア革命とは何か、を究明しようとしたものに他ならないが、足かけ三年間ひんばんに開かれた研究會の席上、われわれが否應なしに感得せしめられたのは、次のことであつた。すなわち、日本關係、西洋關係の研究發表をわれわれ中國研究關係者が理解することは、細部にまで立ち入つてはともかく、概略的には必ずしも困難ではなかつた。しかしその逆に、中國に關してのわれわれの報告——この場合、辛亥革命がテーマなのであつたが——をそれらの人びとに理解してもらおうと思えば、ほとんど一つ一つの固有名詞、用語から説明してかからねばならず、まことに難澁をきわたるのである。」というように述べておられる。氏のこの實感、文獻の翻譯・紹介というもつとも基礎的な仕事を中國史研究者がいかに怠つてきたかということであり、また、中國史研究者が、その「ギルド」の内部でのみ通用する研究に熱中し、「ギルド」を破る努力をしてこなかつたということとして、私には受けとめられる。一連の計畫の出發點は、少くとも島田氏においては、ここにあつたと思われる。

文獻の翻譯、文獻の紹介・解題、目錄・索引の作成などの仕事は、地味な基礎的な仕事であり、研究者の誰もが多かれ少かれ自分自身でやらねばならず、そして、いきおい誰かが多くの人にかわつてこういう仕事を精力的にやることになるものである。しかし、こ

うした仕事のおくれや不足は、島田氏がぶつかられた問題のひとつの要因にすぎないと私は思う。日本史研究にはその「ギルド」のくせがあり、西洋史研究にも、やはりその「ギルド」のくせがある。

私たちは、日本史研究・西洋史研究の成果を理解しようとする場合、日本史研究者・西洋史研究者の姿に自分自身を似せて考えることに慣れてしまっている。それは、この分野の研究には、近代ブルジョア史學の基礎がともかくも築かれていて、私たちの日常的意識——常識が、このような日本史研究・西洋史研究に近づきやすくなっているからである。中國史研究の成果を理解しようとする人たちは、やはり中國史研究者の姿に自分自身を似せることによってしかそれを理解できない。しかし、その發想法は、「正史」の發想、士大夫の發想を引きずっているから、要するに「通」でないとわかりにくいのである。知識の量よりも問題は知識の體系の方にある。しかし、從來の日本史研究・西洋史研究の體系が受け入れやすいように中國やアジアの近代を説明し直してみたとしても、中國やアジアの近代の現實を説明したことには決してならないだろう。困難はそこにあるはずである。打ち破るべきは、まず、中國やアジアの近代をつかみ切れない士大夫的世界觀やブルジョア史學の方法であり、固有名詞や用語を使う場合のせまい「ギルド」意識である。文獻の翻譯・解題・目錄・索引作成の仕事は、問題解決のひとつの要素にすぎない。

『辛亥革命の思想』は、基本思想において一致した共同研究グループが、讀者に訴えかけようとする何ものかをもつて出版したものであり、辛亥革命についてのひとつのイメージ構成を積極的に意圖したものであって、漠然とした文獻紹介ではない。單なる文獻主

義、蓄積趣味の仕事では決してない。「旗幟」が鮮明であり、健全な研究業績である。

しかし、一般的には、文獻の考證・解題・目錄作成・索引作成等の仕事の發展は、研究の健全な發展にとって「毒」にもなり「藥」にもなるものである。文獻と考證で重武裝して、歴史の全體的展望を持たずに自分の小さな城をどこかに築いてそれを生涯守りつづけようとするような研究が、革命運動史研究をむしろ、革命思想の研究をおかすようになることは、今日の思想狀況と學界の狀況から考えてむしろ當然の成り行きと思われる。中國近代史の學問は、そのようなものとして當分肥大化を續けるであらう。

本書の編集・翻譯・解題に携わった方がたと、私自身をもふくむ本書の讀者が、本書によって築いたもの、本書から學んだものを、今後どのような方向に發展させて行くかは重要な問題であると同時に、また興味ある問題でもある。

(石田 米子)

宋代商業史研究

斯波義信 著

昭和四十三年二月 風間書房刊
A5判 本文五二二頁 附索引

唐宋時代の經濟史上における顯著な特色の一つは、言うまでもなく、商業の未曾有な發展である。商業經濟は、特に宋代に入っていくそのの進歩發展を見た。宋代の經濟史研究は、田制や通貨の問題